



出会って、かかわって、そこから自分自身と社会を知る ——現場に臨む臨床社会学



私は社会学の立場からケアや支援をテーマとしてきました。この18年ほどは、多摩地域で暮らす知的障害者の地域生活支援活動にかかわっています。

社会学についての定義はたくさんありますが、私はシンプルに「社会問題について考える学」だと思っています。なかでも臨床社会学は、社会問題の解決や事態の改善に取り組む人たちとともに現場に立ち、現場から考える学問です。そして私が採用しているのは、「参与観察」といって、実際に支援に携わりながら、いろんな人と出会って話を聴くという社会調査手法です。私は参与観察を用いながら、臨床社会学の立場で、多摩地域の支援現場に通いながら、現場で起きていることについて言葉にしようとしてきました。

たとえば、知的障害の人への支援というと、障害が重度の方が大変で、軽度の方が簡単だと思われがちです。一般の学生は、障害について具体的なイメージがほとんどないので、「重度」と聞けばなんとなく大変そう、「軽度」なら楽だろうと思うのでしょうか。けれども、実際の現場を少しでも知っていれば、そんな単純な話ではないのがよくわかります。

知的障害や発達障害の場合、コミュニケーション上で困難や問題が生じることが多くあります。こちらの説明がわからなかったり、自分の思いを正確に表現できなかったり。でも、コミュニケーションは本来、双方向のもので、これらは「こちらの説明が相手のわかるようなものになっていなかった」「こちらがその人の思いを理解できなかった」と言い換えることもできます。

そう考えると、重度なら大変で軽度なら楽という話になりません。軽度の人であれば、確かにこちらの説明がある程度わかったり、自分の思いも多少表現できたりするかもしれません。ただ、こちらが「通じているはず」と思い込んでしまう可能性も高くなります。そうなると、ズレや行き違いを把握するのが難しく、かえって困難や問題が生じやすいときもあるでしょう。

こうしたズレや行き違いを把握していくことが、支援にもつながるし、皆が生きやすい社会を作ることにもつながると私は考えています。

そのために重要なのは、まず出会うこと。そして実際にかかわってみて、相手を少しでも知ること、そして自分が何を感じてしまうのか、どこで勘違いしてしまうのかを体験すること。同時に、言葉にする作業を覚えることも大切で、そのためには本を読んだり友人と議論したりすることも必要です。

ゼミでは、まず実際に出会える機会をなるべく作っています。また同時に、講読や自由研究をしながら、ディスカッションを重ねます。出会ったとき、考えたとき、その思いを言葉にするのは学生だってなかなか大変です。それを皆でやり続けることで、「わからない」他者とともにある方法について、一緒に考えていけたらと思っています。

学生の声

車いすや白杖体験で障害がある人の社会課題を体感しました



社会学科 2年 三井ゼミ
馬場瑞希さん

三井ゼミでは、福祉や障害、医療など幅広い分野を学ぶとともに、通常できない体験もできます。なかでも車椅子や白杖の体験ができたのは貴重でした。普段歩いているときには気にならない段差や道のごぼごぼが車椅子には不安定なこと、白杖では点字ブロックの大切さに気付き、体の不自由な方の意見を聞いたり、その方たちの視点で考えたり

することの大切さを体感しました。私の研究テーマは障害者と健常者との壁についてです。なかでも心理的な壁、特に障害者に対する偏見をなくすためにどのようにすればいいのか考え、障害があることで不利になってしまう社会を解決したい。そして障害の有無にかかわらず平等に生きていけるような社会を創っていきたくて考えています。